

マルコによる福音書 7 章 1 節～13 節

2016 年 3 月 24 日

古本 靖久

1、聖歌 396 番 「わたしたちはひとつ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 74 ページ）

4、テキストの位置

マルコによる福音書では、イエス様は福音をガリラヤの人々にまず届けていました。

4 章から 6 章の中では、イエス様は弟子たちやガリラヤの群衆に奇跡をおこない、人々をいやし、様々な教えを語ってこられました。

しかし今回の場面には、久しぶりにファリサイ派と律法学者が出てきます。彼らはこれまでも「中風の人をいやす（2：1～12）」場面でイエス様は神さまを冒瀆していると考え、「レビを弟子とする（2：13～17）」箇所では徴税人や罪人と食事をするイエス様を批判します。また「安息日に麦の穂を摘む（2：23～28）」イエス様の弟子を非難し、「安息日に手の萎えた人をいやす（3：1～6）」イエス様と論争をおこないます。

今回、久しぶりに彼らはイエス様の元にやってきます。群衆ではなく、論敵がイエス様のまわりに集まってくるのです。さて今回は、彼らとの間にどのような会話がおこなわれるのでしょうか。

福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句
	7:1-13	父祖たちの伝承とは
	7:14-23	旧約聖書の食物規定



5、節ごとに

◆父祖たちの伝承とは

7:1 (そして) ファリサイ派の人々と (エルサレムから来た) 数人の律法学者たちが、エルサレムから来て、イエス (彼) のもとに集まった (る)。

まずファリサイ派と律法学者について確認しておきましょう。ファリサイとは「分離する者」という意味です。「聖」と「俗」、「清い」と「汚れ」をはっきりと区別し、自分たちを「汚れ」から守ろうとしていました。

また律法学者は、律法 (モーセ五書: 旧約聖書の創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記のこと) の解釈をして、その適用を細かく定めていました。例えば「安息日を守りなさい。それは、あなたたちにとって聖なる日である」という戒めがありますが、具体的にどのようなことをしたらいけないのか、などについて、議論をしていきました。

ちなみにファリサイ派の人々は、どこにでもいたようです。そしてその場所で、自分たちのアイデンティティを保つために、他の人々との区別をしていきます。ところが自分たちだけが清い生活を目指すこと自体には何の問題もないのですが、彼らはその生活を他人にまで強要していたのでした。

7:2 そして、イエス (彼) の弟子たちの中に汚れた (不浄な) 手、つまり洗わない手で (パンを) 食事をする (食べている) 者がいるのを見た。

そんな彼らの目に入ったもの、それは手を洗わずにパンを食べるイエス様の弟子の姿でした。

「汚れた」と書いてあると「よごれた」と読んでしまいますが、ここでは衛生的なことを問題にしているのではありません。宗教的な「けがれ」について言及しているのです。「穢れ」や「不浄」と書いた方がいいのかもしれませんが。

彼らはこのように考えていました。人が触れる物の中には世俗のもの、つまり「聖」ではない神さまに属さない物があるのだと。そしてそれらの物を「不浄」と呼びました。もしその「不浄」なものに触れてしまっていたら、食事をするときに体の中まで「不浄」となってしまうと考えたのです。だから手を洗わずに食べる弟子たちはけしからんと言うのです。



7:3 — ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人（父祖たち）の言い伝え（伝承）を固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、

3 節と 4 節との前後には、「——」がついています。これはマルコ福音書の著者が、読者に分かりやすいようにと書き加えたものです。

旧約聖書には、「汚れたものに触れると清めなければならない」という定めがあります。つまり、汚れたものに触れた人は「清めの儀式」をしなければなりません。

そこでユダヤ人は、たとえ汚れたものに触れたかどうかわからなくても念入りに手を洗えば大丈夫だと考え、いつもそうするようにと教えてきました。これが「父祖たちの伝承」です。しかしそのような記述は、旧約聖書にはないのです。

7:4 また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や【寝台】を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある。——

また市場のような人の多く集まる所には、異邦人や罪人もいるかもしれません。その人たちに不注意に触れてしまっていたら大変です。だから念には念を入れて、体を洗ってからでないと食事をしなかったのです。

ヨハネ福音書のカナの婚礼の場面に、2～3 メトレテス(約 90ℓ)入りの水がめが 6 つ出てきました。その水は清めに用いる物です。それだけの量の水を必要とするほど、彼らは日常的に「洗う」ことに固執していました。

7:5 そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが（彼に）尋ねた（る）。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人（父祖たち）の言い伝え（伝承）に従って歩まず、汚れた（不浄な）手で食事をす（パンを食べる）のですか。」

彼らは弟子たちを批判します。ユダヤ人はこうあるべきという考えがあったのでしょう。自分たちが大切にしてきたものをないがしろにするような姿に立腹したのです。

しかしわたしたちも、自分たちの行いを振り返る必要があるように思います。「教会はこうあるべき」、「信仰はこうでないと」と強く思うがあまり、人を非難し、排除してはいないでしょうか。そもそもわたしたちが大切にしているものは、聖書に基づいているものなのか。考えながら歩いていくことが大切なのではないでしょうか。

7:6 イエス（彼）は（彼らに）言われた。「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書い（かれ）ている。『この民は口先（くちびる）ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。』

この言葉は、イザヤ書 29 章 13 節にあります。

主は言われた。「この民は、口でわたしに近づき 唇でわたしを敬うが 心はわたしから遠く離れている。」

イエス様は彼らの行為を、「表面的な敬虔」だと批判します。外見さえきれいに保っていればそれでよいと考えて、一番大切な神さまへの信仰の心を疎かにしているのだと、イザヤの言葉を用いて彼らに言うのです。

7:7 （また彼らは）人間の戒めを教えとしておしえ、むなしく（いたずらに）わたしをあがめている。』

さらに彼らに対し、あなたたちはいつの間にか自分たちの伝承を大切にしていまい、見せかけの信仰しか持つことが出来ていないのだと告げます。

大変厳しい言葉です。しかし彼らファリサイ派の人々や律法学者たちは、それほどまでに批判されなければならない人たちなのではないでしょうか。

彼らは神さまからの戒めを本当に大切にしていました。神さまの前に胸を張って立つ者となれるように、清い生活を心がけ、律法を犯さないようにと注意深く生きていました。

しかし彼らは神さまへの感謝ではなく、いかにして自分たちを「清い」枠組みの中に組み入れるかということに心を向けていきました。そして同時に、「汚れた」者を自分たちの枠組みから排除していきます。イエス様はその彼らの考えを否定されたのです。

7:8 あなたたちは神の掟（戒め）を捨てて、人間の言い伝え（伝承）を固く守る（に固執し）ている。」

たとえば安息日というのは、本来すべての人たちや奴隷、そして家畜に至るまで、みな休むことができるという恵みの戒めでした。

しかしそれがいつの間にか、「～してはならない」という禁止の戒めに変えられていきました。人を生かすものではなく、殺すものへとなっていたのです。

7:9 (そして) 更に、イエス(彼)は(彼らに)言われた。「あなたたちは自分(たち)の言い伝え(伝承)を大事にして(立てるために)、よくも神の掟(戒め)をないがしろにしたものである。

8節と同じような言葉を、イエス様は繰り返し語ります。よほど頭にきていたのでしょう。

律法主義という言葉があります。これは、旧約聖書の律法の本来の精神を忘れ、条文にとられて1字1句にこだわる態度を指します。律法学者は一つ一つの文字に固執し過ぎて、大切な物が見えていませんでした。

「木を見て森を見ず」ということわざ通り、彼らには律法の中に注がれた神さまの愛が見えていなかったのです。

7:10 (つまり) モーセは、『(あなたの) 父と (あなたの) 母を敬え』と言い、(また) 『父または (や) 母をののしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っている。

ここでイエス様は、具体的な例を語られます。モーセの十戒には、第五戒として「あなたの父と母を敬え」という一文があります。また父や母をののしっても、死刑になるという定めもあります。しかしあなたたちはこの戒めにあるように、本当に父と母を敬っているのか、そのようにイエス様は問いかけます。

7:11 それなのに、あなたたちは言っている。『もし、だれかが父または母に対して、「あなた(がわたしの中から)に差し上げるべき(使おうとしている)ものは、何でもコルバン、つまり神への供え物です」と言えば、

「コルバン」とはヘブライ語で、「献納物(供え物)」という意味を持ちます。聖書はギリシア語で書かれていますが、この「コルバン」はヘブライ語の読みのまま書かれています。イエス様の時代にも、ヘブライ語のままおまじないのように使われていたのでしょう。

例えばお母さんがあなたの持っていた大切な花瓶を使おうとしていたとします。しかしあなたは、その花瓶をお母さんに使わせたくなかった、その時に「コルバン」と言うのです。つまり、「その花瓶は神さまにささげることになっている物だから、使ってははいけませんよ」と宣告することになるのです。

花瓶だったら、別に使えなくても「悔しい」で済むかもしれませんが。しかし彼らは所有物すべてを神さまにささげたといい、親を助けるためにも使おうとはしなかったそうです。

7:12 その人はもはや父または母に対して何もしないで済むのだ』と（している）。

そのような態度が、果たして「父と母を敬う」ことになっているのでしょうか。そのようにイエス様は咎めるのです。

7:13 こうして、あなたたちは、受け継いだ（伝えてきた）言い伝え（伝承）で神の言葉を無（効）にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている。」

このようなことが、ほかにもたくさんあるのだと言います。神さまの言葉が無効にされるということは、神さまとの契約も反故にされるということです。イエス様はファリサイ派の人々や律法学者に、「あなたたちは神さまから離れていっている」と警告されているのです。

<今日の箇所から>

イエス様は今日の箇所、二つのことを教えられているように思います。

第一に、「不浄」に対する考え方です。イエス様の弟子たちは、手を洗わずに食事をしていました。しかし弟子たちはみなユダヤ人であり、「手を洗うように」という伝承は知っていたはずですが、でも洗いませんでした。それは何故でしょうか。

イエス様のこれまでの行いを見て、「清い」、「けがれている」などと考えるのはおかしいと感じたのではないかと思います。イエス様は病人、罪人、異邦人、悪霊に取りつかれた人たちに触れ、共に歩まれました。「洗う」ことによって人々を排除することはなかったのです。だから弟子たちは、手を洗う必要性など感じなかったのだと思います。

第二に、伝統や伝承に固執することへの警告です。ファリサイ派や律法学者は、今のクリスチャンと比べるとはるかに敬虔な生活をしていたように思います。しかし細かいところばかりを見すぎて、いつしか本当に大切な物を見失っていたように思います。

わたしたちはどうでしょうか。教会の伝統や今までのやり方を、それが絶対だというように決めつけてはいないでしょうか。そこに固執することで、神さまの愛に背を向けてはいませんか。イエス様の存在を、否定してはいないでしょうか。考えていきたいものです。

今回の学びはこれで終わります。次回は4月28日(木)10時30分からです。「旧約聖書の食物規定」(マルコ7:14~23)について学んでいきます。